



MARCH 2013

No.23

東京大学医学教育国際協力研究センター  
International Research Center for Medical Education

# CENTER NEWS

[www.ircme.u-tokyo.ac.jp](http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp)



雪景色の医学図書館

## Contents

- |   |  |
|---|--|
| ● 当センターの医学部移管について ..... 2   | ● 模擬患者つつじの会 ..... 5<br>講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝                             |
| ● インドネシア出張報告 ..... 2<br>講師 大西 弘高                                    | ● 臨床推論勉強会 ..... 5<br>講師 孫 大輔   |
| ● シンポジウムの報告 ..... 3<br>教授 北村 聖                                      | ● Wong 先生のクリニカル・ケース・カンファランス ..... 6<br>講師 孫 大輔                         |
| ● 新クリニカルクラークシップ指導者養成講習会 ..... 3<br>講師 孫 大輔                          | ● Wong 先生によるスタンフォード式 FD プログラム ..... 6<br>講師 孫 大輔                       |
| ● 東京大学医学教育セミナー ..... 4<br>講師 大西 弘高                                  | ● 離任あいさつ ..... 7<br>特任教授 Jeffrey G. Wong, MD, FACP                     |
| ● 医学教育基礎コース ..... 4<br>講師 孫 大輔                                      | ● 浙江大学出張およびシンガポール APMEC 出席報告 ..... 7<br>特任教授 Jeffrey G. Wong, MD, FACP |
| ● Editorial Seminar ~医学雑誌の質の向上を目指して~ ..... 5<br>教授 北村 聖・特任専門職員 田中 紫 | ● センター日誌／編集後記 ..... 8  |
| ● 東大医学部共用試験 OSCE2013 ..... 5<br>講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝                 |  |

## 当センターの医学部移管について

医学教育国際協力研究センターは、2000年の創立以来、東京大学の全学センターの1つとして機能してきました。ただ、同様の全学センターと比べると規模も小さく、また医学系研究科や医学部以外との協力体制に乏しいため、2012年3月の外部評価結果も踏まえ、医学系研究科附属教育研究施設の1つである

「医学教育国際研究センター」として再出発することが今後の発展のためにより望ましいとの結論となりました。基本的な体制、現在の活動については、大きな変化はありません。今後とも、当センターへのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

## インドネシア出張報告

講師 大西 弘高

2012年12月5～9日の予定で、インドネシアのジャカルタへの出張を行った。主な業務は、① Atma Jaya 大学でのポートフォリオ教育に関する指導、② 国立 Islam 大学での臨床推論教育に関する指導、③ Jakarta 医学教育カンファレンス (JakMED) での講演の3つであった。

Atma Jaya 大学は、宗教系私立大学であり、Jakarta 市街で北部に位置している。200床ほどの教育病院を備え、小規模ながらきめ細やかな教育を実施している。今回は、Dr. Natalia Puspawati の招きにより、12月5日に訪問した。課題は、Atma Jaya 大学医学部がパイロットプロジェクトで moodle によるコンピュータ基盤型ポートフォリオを開発し、これを有効活用していきたいという内容であった。医学教育部門が50名のボランティア学生に声をかけ、臨床前教育時点での患者実習の感想などを基にポートフォリオを書かせていた。メンタリングなどは実施できておらず、内容としては経験の記述や感想に留まっていた。私が学生に対してポートフォリオに関する聞き取りを行ったところ、ポートフォリオに関し、一部の学生は学びに役立ったと答えたものの、残りの学生は何を書くべきかが十分には理解できていなかった。また、協力した教員たちは、moodle を用いたシステム自体に慣れることができず、メンタリングやフィードバック、評価に活かすことは難しい状況であった。全体としては、このような試みは興味深いチャレンジであり、少なくともポートフォリオに新たな課題が見えてきたのはよかったですと締めくくった。

国立 Islam 大学 (UIN) には、以前から当センターが関係してきた。2005年に医学部が創設されると共に、新校舎建築に日本政府からの円借款が決まった。これに伴い、教員のトレーニングのため、30名が日本で博士、修士の課程を修めることとなった。今回招聘してくれたのは、私が佐賀大学博士課程への留学を仲介した Dr. Marita Fadhilah であり、2012年4月に帰国してすでに UIN で活躍している。12月6、7日に UIN を訪問し、8、9日も JakMED での行事がない時間帯にミーティングを行った。与えられた課題は、カリキュラム全体の評価であった。UIN は、宗教省が創設した大学で、地方の推薦を受けた学生をジャカルタで育てて地方に戻すというミッションを持つ。また、創立当時より PBL を含めた臓器系統別カリキュラムを実施している。医学教育部門長の Dr. Fika Ekayanti との議論では、カリキュラム全体の設計はよいものの、今後の臨床前教育の改善の方向について、当方からの示唆が必要そうであった。教員からの聞き取りで得られた結論は2つである。1つは、心理社会的な情報収集が上手くできていないことである。疾患 (disease) の診断には生物医学的な観点での理解が深まれ

ばよいが、患者が症状や疾患をどう捉えるかを含めた「病 (やまい: illness)」の全体的把握には心理社会的な情報収集や評価が欠かせない。もう1つは、学生のプロフェッショナリズムが以前より低下していることである。将来医師として地域のために奉仕するという意識が育っていないという指摘があったが、そのための教育があまり十分でないという点が明らかとなった。これらの点を指摘した報告書を作成し、UIN に提出したことで、今後の改善に期待したい。

12月8、9日には、Indonesia 大学にて JakMED が開催され、私は2つのシンポジウムにて講演を行った。1つは、Continuing Professional Development (CPD) のテーマであった。インドネシアでは、医学部が医師会などと協力して、CPD プログラムを実施するという決まりになっていることを知った。わが国では、医師会が開業医向け、各専門学会が専門医向け、そして大学医局は系統立っていないがアカデミックなキャリアを目指す医師向けの教育を行っている。最近では、各地域での勉強会や、メールやウェブ上でのコミュニティを活かした意見交換などが、より動機づけの高い学びにつながっていることも伝えしたが、彼等の状況の違いを感じた。もう1つのテーマは、医学部がどのように地域医療に関わっていくかについてであった。近年、わが国でも地域基盤型医学教育が盛んになりつつあるが、自治医大の以前からの取り組みを除くと、まだ各医学部が手探りでやっているのが実情であろう。1997年からの臨床教授システム、2001年開始の医学教育モデル・コア・カリキュラムや2004年開始の新医師臨床研修システムにより、地域医療現場での教育が重視されている点を述べた。Indonesia 大では、地域住民への奉仕という観点から、学生が患者案内のボランティアプログラムを実施していることなどが紹介され、話題を呼んでいた。



▲ Atma Jaya 大学での学生との懇談



▲ ジャカルタ医学教育会議

# シンポジウムの報告

教授 北村 聖

平成 24 年度文部科学省先導的大学の改革推進委託事業「高齢社会を踏まえた医療提供体制見直しに対応する医療系教育の在り方に関する調査研究班」の医学チームシンポジウムが 2012 年 12 月 25 日に東京大学医学部鉄門記念講堂で開催された。

昨年度は診療参加型臨床実習の拡充をテーマに開催され、今年度は、午前部の部において、昨年度の継続という意味で診療参加型臨床実習の拡充と医学教育の国際認証についてセッションが組まれた。特に国際認証については、日本医学教育認証協議会（仮称）の設立に向けての取り組みや、WFME の基準による外部評価を受けた経験などが紹介され、日本においてなじみの少ない教育認証について理解を深めた。

午後の部では、近未来に予想される超高齢社会に向けて、しっかりと対応することのできる医師をどのように養成するかが話し合われた。鳥羽研二氏（国立長寿医療研究センター病院長）からは、想定される高齢社会について紹介された。特に、死亡者が 120



▲ プログラム

万人 / 年が 160 万人 / 年に増加する見込みで、それに対応する医療者が少ないこと、そしてそれが特に大都市圏で大きな問題になるであろうことが紹介された。

最後のセッションは、高齢社会に対応する医療のキーワードである多職種連携教育に焦点を当て議論された。酒井郁子氏（千葉大看護研究科）からは、長年にわたる看護師主導の多職種連携教育の先端事例が紹介された。

この研究班には医学チーム以外にも、歯学チーム、看護チームが設置され各々でシンポジウムやワークショップが開催され、高齢化社会に向けた医療者教育の研究成果が 3 月に報告書にまとめられる予定である。



▲ 総合討論

# 新クリニカルクラークシップ指導者養成講習会

講師 孫 大輔

2013 年 1 月より新クリニカルクラークシップ（診療参加型臨床実習）が開始となるにあたり、「参加型」とは実際どのようなものであるのか、従来とどう変わるのか、説明会を兼ねた指導医講習会を開催することとなった。教務委員会が主催となり、北村教授のもと、総合研修センターおよび医学教育国際協力研究センターの教員にて企画・実施した。

今回の講習会では実際に学生の指導にあたる指導医および初期研修医を対象とした。卒前臨床実習における診療現場での効果的な教育方法についても知ってもらい、FD（faculty development）としても位置づけられた。11 月 13 日、11 月 26 日は指導医を対象として行い、それぞれ 39 名、49 名の参加。11 月 29 日には初期研修医を対象として行い、65 名の研修医が参加した。

講習会のプログラムは、はじめに「参加型臨床実習の概論」について、大西先生あるいは江頭先生からの説明があった。旧カリキュラムからの変更点として総実習数が 58 週から 72 週へ増えること、新たに「総合内科」「地域医療」「感染制御部」「臨床研究支援センター」の実習が開始されることなどが説明された。

次に文部科学省研究班作成の DVD「映像で見る診療参加型臨床実習」の一部を視聴してもらった。北村教授が患者役で登場する場面では毎回笑いがこぼれた。ここでは「診療参加型」と

いう言葉からイメージされるような、採血や検査手技をさせるということよりも、むしろ学生は、病歴や診察、検査結果から診断に至る考え方を学んだり、症例プレゼンテーションを行ったりと、情報収集や臨床推論を行うことで診療チームの一員となることが求められることが強調された。

その後、北村教授から「1 分間指導法」(one minute preceptor) について説明があった。忙しい診療現場でも短い時間で効果的な教育をするための技法である。

最後に私から「ポートフォリオについて」と題して、学生が実習で使用するポートフォリオの使い方について詳しい説明を行った。

参加者アンケートでは「多くの指導医が受講できるように、もっと何度か開催してほしい」、「DVD は大変分かりやすく参考になった」、「指導する側のインセンティブを上げる方策を考えてほしい」など、おおむね好評を得た。

今後も、クリニカルクラークシップの指導にあたる先生方を対象として、定期的開催する予定としている。



▲ 1 分間指導法について説明する北村教授

# 東京大学医学教育セミナー

講師 大西 弘高

2012年10月より、外国人特任教員として South Carolina 医科大学の Jeffrey G. Wong が6カ月の予定で滞在しておられるため、この時期のセミナーを継続してお願いする形となった。ただ、他にも興味深いテーマでお話いただけそうな先生方からのリクエストを受け、第48回、第50回はそれぞれ Daniel Wolpaw 先生、Daniel Salcedo 先生とのコラボレーション企画とした。テーマは、基本的に教員3名と Wong 先生との話し合いを通じ、現在の日本の医学教育においてニーズが高そうな内容を選ぶことになった。

結果として、Wong 先生が関係したこの期間の4回のセミナーは、マンネリズムに陥ることなく、非常によい形で展開できたのではないかと思う。対象として、医学生から指導医、医学教育関連部局の専門家まで、広い聴衆を集めることができた。また、内容的にも医学教育の基礎となる内容から、実践的な内容、すぐに役立つ内容が多かった。Ustream での配信についても、徐々に運営に慣れてきたため、トラブルが減ってきているように思われる。今後も、医学教育セミナーは当センターの目玉の行事として重視し、一層内容の充実を図るようにしていきたいと考えている。



▲ 第50回セミナーにおける“USMLE Step2 CS”の実演風景

## 医学教育セミナー（平成24年10月～平成25年2月）

|   |
|---|
| ○第48回 11月1日(木) 18:00～19:30 医学図書館 3F 333 会議室   |
| 講演者：ダニエル・ウォルポー先生<br>米国 ケース・ウェスタン・リザーブ大学医学部 教授<br>2003年度東京大学医学教育国際協力研究センター 客員助教授<br>テーマ：Adaptive Expertise in Medical Education  |
| 講演者：ジェフリー・ウォン先生<br>東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授<br>米国 サウスカロライナ医科大学教授<br>テーマ：Assessing the Developing Expertise in Learners  |
| ○第49回 12月6日(木) 18:00～19:30 医学図書館 3F 333 会議室   |
| 講演者：ジェフリー・ウォン先生<br>東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授<br>米国 サウスカロライナ医科大学教授<br>テーマ：サウスカロライナ医科大学のカリキュラムおよび文化の変革<br>～考え方、苦難のプロセス、教育アウトカム～  |
| ○第50回 1月22日(火) 18:00～19:30 医学図書館 3F 333 会議室   |
| 講演者：ジェフリー・ウォン先生<br>東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授<br>米国 サウスカロライナ医科大学教授<br>講演者：ダニエル・サルチェード先生<br>日本大学医学部医学教育企画・推進室 助手<br>テーマ：Evaluating Clinical Skills of medical students: The United States Medical License Examination (USMLE) Step 2 – Clinical Skills (CS) examination. |
| ○第51回 2月28日(木) 18:00～19:30 医学図書館 3F 333 会議室   |
| 講演者：ジェフリー・ウォン先生<br>東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授<br>米国 サウスカロライナ医科大学教授<br>テーマ：Accrediting Medical Schools: Lessons learned from Liaison Committee on Medical Education (LCME) process in the United States  |

# 医学教育基礎コース

講師 孫 大輔

2011年度から始まった医学教育基礎コースは、本学医学部の Faculty Development (教員能力開発) の一環として、医学部教員(特に中堅～若手教員・新任教員)を対象に、実践的な教育法について学べるコースを実施している。今年度も計9回のセッションを予定し、すでに7回を終えた。講義はグループ・ディスカッションやロールプレイなど参加型の形式もありませ、楽しく学べるようになっている。

一部内容を紹介しますと、第3回「研修医をどうやって教える?」(孫)では、具体的方法としての「効果的質問法」と「1分間指導法」を参加者にロールプレイで体験してもらいながら学んで

|     | 日時       | テーマ                                  | 講師 |
|-----|----------|--------------------------------------|----|
| 第1回 | 6.12(火)  | よい教員の資質:教育理論との関連                     | 大西 |
| 第2回 | 7.9(月)   | 魅力あるレクチャーの方法                         | 北村 |
| 第3回 | 9.11(火)  | 研修医をどうやって教える?                        | 孫  |
| 第4回 | 10.9(火)  | 臨床能力の評価                              | 大西 |
| 第5回 | 11.12(月) | MCQ形式の問題の作成の仕方<br>～国家試験方式の良問を作りましょう～ | 北村 |
| 第6回 | 12.11(火) | ワークショップとは?                           | 孫  |
| 第7回 | 1.8(火)   | 臨床推論の教育                              | 大西 |
| 第8回 | 2.25(月)  | プロフェッショナリズムの教育                       | 北村 |
| 第9回 | 3.12(火)  | コミュニケーション能力をいかに教えるか                  | 孫  |

頂いた。第4回の「臨床能力の評価」(大西講師)では、教育目標分類(知識・スキル・態度)の有用性、その分類に応じた具体的評価法、アウトカム基盤型教育などについて学んでもらった。第5回の「MCQ形式の問題の作成の仕方」では、国家試験方式の良問の作り方について、北村教授から分かりやすい講義があった。第6回の「ワークショップとは?」(孫)では、医学教育に応用可能なワークショップのデザインの仕方について解説し、実際にワールドカフェ形式を参加者に体験してもらった。第7回の「臨床推論の教育」(大西講師)では、臨床推論プロセスの分類、症例プレゼンテーションによる臨床推論能力の評価などについて具体的な指導例も示しながら解説があった。

毎回10名前後の参加があり、学内のみならず学外の教員、指導医が参加し好評を得ている。

2013年度も定期開催する予定であり、学内の方の参加費は無料(学外の方は1000円)、医学図書館3階研修室にて、毎回18:00～19:30の予定。問合せは、TEL: 03-5841-3583あるいはsondtky@umin.net(担当:孫)まで。



▲ MCQ問題の作り方について解説する北村教授

## Editorial Seminar ~医学雑誌の質の向上を目指して~

教授 北村 聖・特任専門職員 田中 紫

国際的な学術出版社である Wiley-Blackwell との共催で、2012年11月2日に Editorial Seminar を開催した。医学雑誌に論文を投稿する側とそれを編集する側のそれぞれの立場から、より信頼され、質の高い雑誌をつくり上げるための取り組みについて、経験豊富な講師陣7名をお迎えしてご講演いただいた。セミナーは、“Publishing misconduct and peer review”、“Encouraging the publication of high quality clinical research”そして“The future of publishing”の3部構成で行われた。

今回は医学雑誌に携わるすべての編集者と医学研究者を対象に広く広報を行ったため、当日は100名近くの参加者があり、編集者と研究者の割合は半々程度であった。ご自身の経験や実例を交えてのご講演が多かったため、参加者からは具体的な内容で参考になったという声が多く聞かれた。

このようなテーマでセミナーを開催するのは当センターでは初めてのことだが、教育においても非常に重要なツールとなる医学雑誌の質を向上させるためにも、引き続き多くの場で取り上げていただきたいテーマである。



▲ 当日のプログラムと Mark Robertson 氏 (Wiley Japan)

## 東大医学部共用試験OSCE2013

講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝

共用試験 OSCE は、本年度は12月15日(土)に実施した。医学部医学科の M2 学生 107 名が、6つのステーション(医療面接・頭頸部診察・胸部診察またはバイタルサインの測定・腹部診察・神経診察・救急)の試験を受験した。2013年度から2つの変更点があった。1つは実施時期で「参加型臨床実習」が1月下旬から行われることになり、例年の2月上旬から12月の実施となったこと。もう1つは、胸部診察・バイタルサインの測定ステーションの課題の出題に変更があったことである。

当日は評価者として教員が56名(うちセンター教員1名を含む)、模擬患者が42名(M1学生、M3学生、模擬患者つづじの会)、OSCE 教務委員が1名、医学部事務が25名、センター教職員2名が運営に携わった。国土典宏教務委員長にも関わって頂いた。

昨年度は評価者の先生方より集合時間が早いとのこと意見があった。受験生数は増加したが、全体のスケジュールを見直し、僅かではあるが遅くすることができた。

今後も OSCE に関わる皆様のご意見を伺い、各面で改善していきたいと考えている。



▲ OSCE (胸部またはバイタルサインステーション)の様子

## 模擬患者つづじの会

講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝

後半になり、コンソーシアムの形で模擬患者養成を行っている東京医科歯科大学の教員に金子英司先生を迎えた。4期生は来年度4月以降からの医療面接実習に自信をつけて参加できるよう学んでいる。会員の要望を伺い、模擬患者としての基本的なシナリオの効果的な覚え方やフィードバックの方法を学び、実際の学生さんとのロールプレイングの機会を増やした。前半にシナリオを理解して演じ易くするために始めた診断学の講義が好評で現在はシリーズ化されてきた。講義はクイズ形式になっていて楽しく学べる。また、後半になり、勉強会の曜日が変更になって参加できなくなった会員のために補講も行った。

新しい活動として、11月には東京医科歯科大学で Advanced OSCE (CSA) のトライアル1年目で、11名(うち4期生3名)が参加した。10月には参加するために、Advanced OSCE の講義と演習を行った。

12月には本年も東大 OSCE に12名が参加した。模擬患者の質の担保と能力向上をめざし、例年どおり標準模擬患者としての能力評価も実施し、教員から個別にフィードバックを行った。

来年度も引き続き、先輩模擬患者、4期生とともに学べる企画を考えていくと同時に活動の場を広げるよう努力していきたい。



▲ 定期勉強会(診断学の講義)の様子

## 臨床推論勉強会

講師 孫 大輔

医学生を対象とした臨床推論勉強会は診断学実習がはじまった M2 の学生を主な対象として、2011年度より、前任の錦織講師が始めた企画である。症例をもとにしたケースカンファレンスも臨床推論を学ぶことができるが、こちらは臨床推論の基礎から学び、各症候について診断学を中心にじっくりと学べる内容となっている。

2012年度は6月より M2 学生の希望者を対象として、月2回ペースで平日の朝 7:30 ~ 9:00 で開催した。12月までの半年間で計 11 回開催し、毎回 15 名程度の学生が参加した。

内容としては、参考書として「誰も教えてくれなかった診断学」(医学書院)を用い、臨床推論の考え方(仮説演繹法の考え方、感度・特異度・尤度比などを用いた検査後確率の見積り方など)を、各章ごとに学生自身にプレゼンさせて、私が適宜解説をした。また「胸痛」「腹痛」「腰痛」「頭痛」「めまい」など症候ごとに、ペーパーケースを用いて、症例にそって実際にどのように診断にいたるかというプロセスについても学んだ。

2013年1月からは M1 学生を主な対象として新しいシリーズを開始した。今回は「聞く技術」(日経 BP 社)を参考書として用いている。今後も定期的に開催を続ける予定である。



▲ 臨床推論勉強会の様子

## Wong 先生のクリニカル・ケース・カンファランス

講師 孫 大輔

2008年度より開催している外国人教員による English Clinical Case Conference は、北米型の「本場の」臨床推論が学べるケースカンファランスとして、附属病院の研修医・若手医師や医学生を対象として開催し、好評を博してきた。今年度は10月よりサウスカロライナ大学より招聘されたジェフリー・ウォン先生が教える「Wong 先生のクリニカル・ケース・カンファランス」と題して、2012年10月～2013年3月までにかけて全9回の開催を企画した。タイトルから「English」の文字を抜いたのは、英語が得意でない学生も来やすいようにというウォン先生自らの配慮による。主催は総合研修センターと医学教育国際協力研究センターであるが、内容の企画と症例プレゼンテーションにおいて救急部に多大な御協力を頂いており、特に軍神先生に司会進行や通訳の面でも大変お世話になっている。

研修医も参加しやすいように、ランチタイムの12時～13時に入院棟A1階のレセプションルームで開催しており、若手医師や研修医、学生が毎回20名前後参加している。

症例プレゼンテーションは、例えば「31歳男性が頭痛と発熱で救急外来に搬送された」という主訴から始まり、現病歴、既往歴、生活歴、内服薬、バイタルサインと身体所見が順次説明される。ここで一旦ストップし、ウォン先生から「ここでどんな鑑別診断が考えられるでしょうか?ほかにどんな情報がほしいでしょうか?」と

いう疑問が学習者に投げかけられる。「髄膜炎だと思えます」と答えると、「その根拠は?どの所見がそれを支持しているか?他の鑑別診断はどうか?検査をするならどの検査か?」などの質問がさらに投げかけられる。ウォン先生の上手なファシリテーションによって学習者が積極的に議論に参加できる形で進められており、自然と診断に至る推論プロセス、あるいはマネジメントの推論プロセスが身に付くようになっている。

参加者アンケートでは「症例から鑑別疾患や検査・治療を考えていく手順や、鑑別のポイントになる点を学ぶことができた」、「診断と症状への対応に優先順位をつけることを学んだ」、「重要な陰性所見にも注目することが大事と分かった」などの感想をいただいた。

卒前教育と卒後教育を「臨床推論」というベースで橋渡しすることができるこの貴重なカンファランスのシリーズを、引き続き来年度以降も開催したいと考えている。



▲ ケース・カンファランスの様子

## Wong 先生によるスタンフォード式 FD プログラム

講師 孫 大輔

スタンフォード大学の Faculty Development Center で FD を専門に学ばれた客員教授のジェフリー・ウォン先生より、このスタンフォード式 FD プログラムを東大病院の指導医対象に開催することを提案して頂いた。ちょうど診療参加型臨床実習の導入時期であり有意義と考えられたため、2013年1月より試験的に実施することとした。

スタンフォード式 FD プログラムは、学生教育から研修医教育まで広範な教育場面における教育者の行動スキルに焦点を当てており、どの専門科の指導者にとっても有用であるように開発されている。このプログラムは7つのカテゴリーからなり、(1) Learning Climate (学習環境)、(2) Control of Session (セッションの舵取り)、(3) Communication of Goals (学習目標のコミュニケーション)、(4) Enhancing Understanding and Retention (理解と知識保持の促進)、(5) Evaluating Learners (学習者の評価)、(6) Providing Feedback (フィードバックの仕方)、(7) Promoting Self-Directed Learning (自己学習の促進)である。各カテゴリーに90分から120分かけて、講義、教育場面ケースの動画視聴、ロールプレイ、ディスカッションが行われる。インストラクターと受講者のインタラクションと個別の振り返りが重視されている。

初回の FD プログラムは、1月6日と1月14日の2日間に分けて、当センターと総合研修センターの教員8名を対象に行われ、ウォン

先生の見事なファシリテーションにより楽しく学ぶことができた。「学習目標のコミュニケーション」のセッションでは、ロールプレイで筆者が指導医役となり、北村教授が研修医役、救急部の軍神先生が学生役を演じるという何とも滑稽な雰囲気の中、いかに学習目標を意識し、学習者に示しながら行うことができるかを学んだ。ケース動画も米国のものとはいえ、病院カンファ室での教育セッションや、外来における患者説明時の教育場面など非常にリアルで考えさせられるケースとなっていた。8名の受講者からは「強い強調ではなく効果的な強調が学習者の記憶に残る、ということを学んだ」、「学生と研修医の教育に携わるすべての教員にこのプログラムを勧めたい」、「今回で FD に対する自分の概念が変わった」などの評価を得た。

第2シリーズとして2月後半から3月末まで、カテゴリーごと7回に分けて平日夜に開催し、さらに多くの指導医に対して実施する予定である。今後、この FD プログラムを基にした系統的な日本版 FD プログラムの開発も視野に入れている。



▲ ロールプレイの様子

## 離任あいさつ

特任教授 Jeffrey G. Wong, MD, FACP

It is astonishing to realize that my time as the Visiting Professor at the IRCME is almost completed. Spending 6 months at one of the world's most prestigious universities has been an exhilarating and mind-expanding experience. I learned a little about Japanese people and the culture and a little bit more about how the Japanese medical educational system operates. I saw beautiful temples and shrines, spectacular views of Fuji-san, and was deeply moved by sobering monuments commemorating WWII. And while my skill for speaking Japanese is still poor, I worked hard trying to learn it.

My time was spent in lecture presentations, small group teaching of medical students and residents, and small group faculty development workshops for medical educators. I delivered 5 major lectures: (1) Evaluating expertise in learners (with Dan Wolpaw); (2) Reformulating curriculum and culture in medical school; (3) Evaluating Clinical Skills in Medical Students: The USMLE Step 2 CS Examination (with Daniel Salcedo); (4) Accrediting Medical Schools: Lessons learned from the LCME accreditation process; and (5) Update on medical education at Todai. Additionally, bi-weekly Clinical Case Conferences, aimed at teaching clinical reasoning in general medicine topics, were conducted. The conferences were presented with a senior resident, whom I mentored and helped, as they co-taught this academic conference in English and Japanese. I made weekly clinical conference "rounds" with the Emergency Department residents and had two teaching rounds sessions in the Urology Department. Along with Son-sensei in the IRCME, we created a small group teaching series for Todai medical students promoting the need for primary care. Lectures in Kyoto, Sapporo, and Fukuoka, as well as an International Conference in Okinawa, complete the summary of my academic experiences in Japan. Several educational research projects have been spawned and I am excited about continuous collaboration with my new Japanese colleagues.



▲ 第49回東京大学医学教育セミナーで

## 浙江大学出張およびシンガポール APMEC 出席報告

特任教授 Jeffrey G. Wong, MD, FACP

In mid-December of last year, I had the good fortune to be invited to Zhejiang University (ZJU) School of Medicine in Hangzhou, China (中国杭州市浙江大学医学部). This invitation was part of an on-going faculty development project in which I have been participating since December of 2009. China is in the midst of considerable change in its medical education system. Many of the changes are similar to those being contemplated and instituted in Japan. Organized Chinese medicine is struggling with the problem of creating accreditation standards and systems for their medical schools. They, too, have identified the need for medical students to become more active participants on clinical patient care teams during their medical school training. Additionally, they are intent on creating a more "Western-style" graduate medical education system for their post-graduate residents.

My recent work there consisted of a series of educational conferences provided for the benefit of faculty and staff of the ZJU Medical Education Department. The conference topics included: (1) curricular reform; (2) using standardized patients and medical simulation in teaching; (3) faculty development in clinical teaching; (4) incorporating medical students into the health care team; (5) effective evaluation of clinical teaching; and (6) teaching using the humanities for developing professionalism in medical students. I also spent time working with medical students, conducting patient care rounds in the hospital, and engaging them in clinical reasoning skills. In January, I gave an oral presentation at the 10th annual Asian-Pacific Medical Education Conference hosted by the National University of Singapore. My paper was entitled "Teaching without Lectures in the First-Year of Medical School" and described a special module in our curriculum at the Medical University of South Carolina wherein all first-year medical students learn through active-learning techniques based in small-group sessions, creating an academic poster, and formally presenting that poster to their peers.



▲ 浙江大学構内の夕景

| 10 OCT       |   |
|--------------|---|
| 1日           | ジェフリー・ウォン外国人客員教授（米国サウスカロライナ医科大学 内科学 教授）着任（2013年3月29日まで）                                   |
| 5日（～8日）      | ATBH（All together better health）・日本保健医療福祉連携教育学会出席（春田・クスマ）                                 |
| 9日           | 第4回東京大学医学教育基礎コース「臨床能力の評価」（大西）   |
| 9日           | 「模擬患者つづきの会」定期勉強会・シナリオアレンジメント  |
| 12日          | 国際医療福祉大学 小田原 教員研修会講師（春田）  |
| 17日（～12月5日）  | 臨床診断学実習（第2回医療面接実習）実施  |
| 17日（～11月21日） | 臨床診断学実習（HDPE 身体診察診断学実習）実施   |
| 10月22日       | 第1回クリニカル・ケース・カンファランス（ウォン）   |
| 10月28日       | 第22回日本医療薬学会年会出席（飯岡）   |
| 11 NOV       |   |
| 1日           | 第48回東京大学医学教育セミナー（ダニエル・ウォルポー先生 米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学医学部教授 ジェフリー・ウォン先生 東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授） |
| 2日           | Editorial Seminar～医学雑誌の質の向上を目指して～   |
| 12日          | 第5回東京大学医学教育基礎コース「MCQ形式の問題の作成の仕方～国家試験方式の良問を作りましょう～」（北村）                                    |
| 12日          | 第2回クリニカル・ケース・カンファランス（ウォン）   |
| 13日          | 平成24年度第1回クリニカルクラークシップ指導医養成講習会   |
| 13日          | 東京大学医学部共用試験 OSCE 説明会  |
| 26日          | 第3回クリニカル・ケース・カンファランス（ウォン）   |
| 26日          | 平成24年度第2回クリニカルクラークシップ指導医養成講習会   |
| 27日          | 「模擬患者つづきの会」定期勉強会・健康講座   |
| 29日          | 平成24年度第3回クリニカルクラークシップ指導医養成講習会   |
| 12 DEC       |   |
| 6日           | 第49回東京大学医学教育セミナー（ジェフリー・ウォン先生 東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授）                                      |

|     |   |
|-----|---|
| 7日  | 第10回日本ヘルスプロモーション学会出席（孫）   |
| 11日 | 第6回東京大学医学教育基礎コース「ワークショップとは？」（孫）   |
| 12日 | 平成24年度第2回運営委員会  |
| 15日 | 東京大学医学部共用試験 OSCE 実施   |
| 21日 | 第4回クリニカル・ケース・カンファランス（ウォン）   |
| 25日 | 平成24年度 文部科学省先導の大学改革推進委託事業 高齢社会を踏まえた医療提供体制見直しに対応する医療系教育の在り方に関する調査研究 医学チーム シンポジウム |

| 1 JAN     |   |
|-----------|---|
| 6日        | スタンフォード大学式 FD プログラム by ウォン先生（1日目）   |
| 8日        | 第7回東京大学医学教育基礎コース「臨床推論の教育」（大西）   |
| 9日        | 東京大学医学部共用試験 OSCE 再試験  |
| 14日       | スタンフォード大学式 FD プログラム by ウォン先生（2日目）   |
| 15日       | 第5回クリニカル・ケース・カンファランス（ウォン）   |
| 15日       | 「模擬患者つづきの会」定期勉強会・シナリオアレンジメント  |
| 16日（～19日） | APMEC（Asia Pacific Medical Education Conference）出席（ウォン・春田）                              |
| 17日（～19日） | 日本集団災害医学会学術集会出席（孫）  |
| 22日       | 第50回東京大学医学教育セミナー（ジェフリー・ウォン先生 東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授・ダニエル・サルチェード先生 日本大学医学部医学教育企画・推進室 助手） |
| 29日       | 第6回クリニカル・ケース・カンファランス（ウォン）   |

| 2 FEB |  |
|-------|--|
| 6日    | 「模擬患者つづきの会」定期勉強会（補講）                                 |
| 12日   | 第7回クリニカル・ケース・カンファランス（ウォン）                            |
| 25日   | 第8回東京大学医学教育基礎コース「プロフェッショナリズムの教育」（北村）                 |
| 26日   | 第8回クリニカル・ケース・カンファランス（ウォン）                            |
| 28日   | 第51回東京大学医学教育セミナー（ジェフリー・ウォン先生 東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授） |

## 編集後記

日増しに春らしく、木々の緑が色めく季節となりました。  
御蔭様をもちまして、この度1月22日にセンターの重要な活動発信の一つである医学教育セミナーが、第50回目を迎えることができました。また、昨年10月より外国人客員教授にお迎えしておりますウォン先生には、この医学教育セミナーをはじめ、学内外で多岐にわたりご指導ご鞭撻をいただいております。熱心に日本語を学ばれているお姿がとても印象的で、その上達の早さに、スタッフ一同いつも驚きの連続です。  
来年度から新体制となりますが、引き続き実りある充実した活動報告がお届けできるよう、センター一同日々邁進していきたいと存じますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。（山）

## 発行元

発行 2013年3月8日  
 発行人 山本 一彦  
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター  
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254  
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp  
 http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp  
 印刷所 株式会社トライ